九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九州大学附属図書館蔵『おちくほ』解題と翻刻（三）

梁，丹
九州大学大学院人文科学府 ： 博士後期課程

https://doi.org/10.15017/1518328

出版情報：文獻探究. 52, pp.28-41, 2014-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

九州大学附属図書館蔵『おちくほ』解題と翻刻（三）

梁　丹

凡例

一、九州大学附属図書館蔵（545オ7）『おちくほ』を底本とした。

一、できるだけ底本の表記通りに翻刻することに努め、漢字、仮名などもすべて原文のままとした。

一、誤謬、脱落と考えられる箇所も、底本の通りに翻刻し、著しい脱落箇所を「(★)」で示した。

一、底本に句読点、濁点がないが、適宜私に付し、会話文には「　」を施した。また、底本では、和歌の終わりはそのまま地の文に続けるが、ここでは　」で示した。

一、底本に施された後人の手によると思われる朱筆の見せ消ちは、書体が紛らわしいため、正を期して記したものも少なからずあるが、それらも含め原文に線を引き、その右に記した。また、後人による補入箇所は、「〇」で本文中に記載し、その右に補われた語句を示した。

一、反復記号は、原則として底本のままの表記を心がけたが、漢字の後の「〳〵」、「々」等は「々」に統一した。

一、丁数は頭に（　）で示し、丁の表裏はオ・ウと表示した。

解題

（58・オ）

あこき、いかで此御ふみ奉らんと、にぎりもちておもひ
ありくに、さらにへやの戸あかず、侘しとおもふ。少将
とたちはきとはたゞゐすみいでんたばかりをし給ふ。
われゆへにかゝるめもみるぞとおもふに、〇とゞあはれにて、
いかでこれぬすみ出てのちに、北方にこゝろまどは
すばかんにねたきめみせんと、おもひいふほどに、しう
ねく、こゝろふかくなんおはしける。かのかたらひせし少
なごん、かたのゝ少将のふみもてきたるに、かくこもりたれ
ば、あさましう、くちおしう、あはれにて、あこきと、
「いかにおもすらむ。などかゝる世ならん」とうちかた
らいて、しのびてなく。日のくるゝまてに、いかでにてまつらんと
おもふ。少将の笛ふくろぬはするに、とりふれんかたのおぼへぬ

（58・ウ）

まゝに、とみに手もふれぬほどに、北方、へやの戸をあ
けて入おはして、「これ只今ぬひ給へ」といへば、「こゝちなんいと
あしき」とてふしたれば、「これぬいたまはずは、し。へやに
やりてこめ奉らん。かやうの事を申さんとて、こゝに

はおき奉りたるにこそあれ」といへば、まことにさも
してんとわびしくて、あれにもあらずくるしけれど、
をきあがりてぬふ。あこき、へやの戸あきたるとみて、
れいの三郎君よびて、「いとうれしくのたまひしかばなん。
これきたのかたのみ給はざらんまに奉りたまへ。夢〳〵
けしきみえ給ふな」といへば、「よかなり」とてとりつ。いきて、
かたはらにゐて、ふえとりて見などあそびて、きぬの
下にさしいれつ。いかでみんとおもふに、ふくろぬいはてゝ、
（59・オ）
みせにもていきたるほどに、からうじてみて、あはれと
おもふ事かぎりなし。すゞり・筆もなかりければ、ある
まゝに、はりのさきして、たゞかくかきたり。
　人しれずおもふこゝろもいはでさは露とはか
なくきえぬべき哉」とおもひ給ふるこそ」とてもたり。北の
かたいまして、「ありつるふくろは、いとよくぬいたり。やり
戸あけたりとて、おとゞさいなむ」とて、ひきたてゝ、じやう
さゝんとすれば、「いかに、あなたに侍しはことりてと、あ
こきにつげ侍らん」といへば、たてさして、「あのくしのはこえん
とあめり」との給へば、まどひもてきて、さし入るてに入
たれば、ひきかくしてたちぬ。「からうじて、御笛の袋ぬはせ
たまふとて、あけたまへるまになん」といふ。少将、いとゞあは
（59・ウ）
れとおもへる事かぎりなし。暮ぬれば、てんやくのすけ、
いつしかとこゝろげさうしありきて、あこきがゐたる
所によりて、いと心づきなげにゑみて、「あこきはいまは
おきなをおもひたまはんずらんな」といへば、あこき、
いとむくつけくおもひて、「などはさあるべき」といへば、「おち
くぼのきみをおのれに給へれば、この御かたの人には
あらずや」といふに、おどろきまどひて、ゆゝすゝしくお
もふに、なみだもつゝみあへずいづれど、つれなくもて
なして、「男君はおはせず、つれ〴〵なりつるに、たのもしの
御事や。さても、おとゞのゆるしきこえ給へるか、北の方の
のたまふか」といへば、「おとゞのきみもめぐみ給ふ。あがきた
のかたはまして」と、いとうれしとおもへり。あこき、萬の
（60・オ）
事よりも、いかさまにせん、いかでかくとだにつげ奉らん
とおもふに、しづ心なくて、「さていつか」といへば、「こよひぞかし」
と
いへば、「けふは御き日なるものを。何かうたがひあらん」と
いへば、「されど、人もたまへるなれば、あやしう、とくなん」
といひてたちぬ。あこき、わびしき事かぎりなし。
きたのかた、とのゝ御だいまいるほどに、はいまりて打
たゝく。「たそ」といへば、「かう〳〵のこと侍なり。さるよういせ
させ給ひて。御き日なりと申つ。いみじくこそ侍れ。いかゞ
せさせたまはん」と、えいひやらで立ぬ。女君、きくにむね
つぶれて、さらにせんかたなし。さき〴〵おもひつる事、
ものにもあらずおぼへて、わびしきに、にげ〇くるべき
かたはなし、いかでたゞいましなんとおもふに、むねいたければ、
（60・ウ）
をさへて、うつぶしふして、なく事いみじ。火などともし

てければ、おとゞは、夕まどひしたまひて、ふし給ぬ。
きたのかたは、かのてんやくのすけの事によりおきまし
て、へやの戸引あけてみ給ふに、うつぶしふして、いみじ
うなく。「いといたくやむ。などかくはの給ふぞ」といへば、「むね
のいたく侍れば」といきのしたにいふ。「あないとおし。
ものゝつみかとよ。てんやくのぬし、くすしなり。かいさぐらせ
たまへ」といふに、たぐひなくにくし。「なにか。風にてこそ侍らめ。
くすしいるべきこゝちし侍らず」といへば、「さりともむね
はいとおろ|ろ|しきものを」といふほどに、てんやくまいりた
れば、「うちゐさせ」とよび給へば、ふとよりたる。「こゝにむね
やみたまふめり。ものゝつみかとよ。かいさぐりくすりなど
（61・オ）
もまいらせたまへ」とて、やがてあづけてたちぬれば、「く
すし也。御やまひも、ふ|ふ|とやめ奉りて。こよひよりは、いか|か|う
にあいたのみたまへ」とて、むねかいさぐりて、手ふるれば、
女おどろ〳〵しうなきまどへど、せいすべき人もなし。
こしらへかねて、せめてわびしきまゝに、おもひて、なく〳〵、「いと
たのもしき事なれど、たゞいまさらにものなんおぼ
えぬ」といらふれど、「さや。などてかおぼすらん。いまは御か
わ|わ|りにおきなこそやまめ」とて、かゝへてをり。北方は|は|、てんや
く有とおもひたのみて、れいのやうにじやうなども
さしかためでねにけり。あこき、てんやくや入にけんと、
まどひきてみるに、やり戸ほそめにあきたり。むね
つぶるゝながら、うれしうて、ひきあけて入たれば、てん
（61・ウ）
やくか|か|ゞまりをる。いりにけりと、心地もなく、「けふ御き日と
申つるものを、こゝろうくも入たまひにけるかな」といへば、
「なにか、ちかぐ〳〵しくあらばこそあらめ。『御むねまじな|給|』とて、
うへのあづけ奉り|り|給へなり」とて、わたそうぞくもとかで
をり|り|。きみは、いといとうなやみ給ふにそへて、なき給ふ事か
ぎりなし。あこき、とりわきて、などしもものをかく
いみじくおぼして、かゝるは、いかなるべきにかとおもひて、
こゝろぼそくかなし。「御やきいしあてさせ給はんと
や」ときこゆれば、「よかなり」との給へば、あこき、てんやくに、
「ぬしをこそいまはたのみきこえめ。御やき石もとめて
たてまつりたまへ。みな人もねしづまりて、あこきがいはん
に、よもとらせじ。これにてこそ心ざし、ありなしみえ
（62・オ）
はじめ給はめ」といへば、てんやく、やとうちはらひて、「さな
なり。のこりのよはひすくなくとも、一すぢにたのみ給はゞ、
つかうまつらん。いは山をもとおもへば、ましてやき石は
いとやすし。おもひにさしやきてん」といへば、「おなじくは
とく」とせめられてぞ、いにゝけんやは。いりたちたるやうな
れば、いとやすし、なさけをみえんとて、石もとめんとて
たちぬ。あこき、「このとし此いみじく侍りつる事の
中に、わびしくもいみじくも侍るかな。いかゞせさせたま
はんずる。なにのつみにてかゝるめをみ給らん。さても
なにの身にならんとて、かゝるわざをしたまふらん」
といへば、君、「さらになんものもおぼえぬ。いまゝでし
なぬ事のこゝろうきに、こゝちはいとあし。此おきなの

（62・ウ）
ちかづきくるになんいとわびしき。そのやりどかけこ
めて、ないれそ」とのたまへば、「さてはらだちなん。なを
なごめさせおはしませ。たのむかたのあらばこそ、こよひ
はたてこめて、あすはその人にいはんともおもひ
侍らめ。少将きみなげきわびたまへども、いかでかは。たゞ
いまあたりにだにおぼしよらん事かたくなん。
御こゝろのうちも仏神をねんぜさせ給へ」といへば、
きみ、げにたのむかたなく、はらからとてあひおもひ
たる事なし、はしたなげにのみあれば、その人
といふべきこともおぼえず。いみじうかなしくて、
たゞたのむ事とは、なみだとあこきとぞこゝろに
かなひたるものにて、さらにこゝにこよひはあれば、
（63・オ）
これ〳〵もなくほどに、おきな、やき石つゝみてもて
きたるを、わびて、手づからとるこゝち、おそろしう
わびしくおぼゆ。おきな、そうぞくときてふして、かき
よすれば、女、「あが君、かくなしたまひそ。いみじく
いたきほどは、おきゐておさへたるなん、すこしやす
まるこゝちする。のちをおぼさば、こよひはたゞに
ふしたまへれ」といふ。いとわびしくて、いたうやむ。あ
こき、「こよひばかりにてこそあれ。御き日なれば、たゞ
ふしたまへれ」といへば、さもある事とやおもひけん、
「さらば、これによりかゝり給へ」とて、まへによりふせば、わび
し。をしかゝりてなきゐたり。あこきもゐて、にく
けれど、うれしきおきなのとくに、御あたりにこよひ
（63・ウ）
まいりたることゝおもふ。ほどなくね入て、くつちふせり。
女、少将のきみのけはひおもひあはせられ、いとゞあいなく
にくし。あこき、いかにして出なんのばかり事をす。
おきなのうちおどろくほどは、いとゞいたくくるしがり
やみ給へば、「あないとおし。おきなのまへ夜しもかう
やみ給ふがわびしさ」とては、又ねいりぬ。あけぬれば、
いとうれしと、たれ〳〵もおもふ。おきなをつきおど
ろかして、「いとあかくなりぬ。いで給ひぬ。しばしは人にしら
せじ。ながくおもひたまはゞ、の給はん事にしたがひた
まへ」といへば、「さかし。我もさおもふ」とて、ねぶたかりければ、
めくそとぢあひたるはらひあけて、こしはうちかゞ
まりて出ぬ。あこき、やり戸ひきたてゝ、こゝに有けり
（64・オ）
とみえ奉らんとおもひて、いそぎてざうしにいきたれば、
たちはきがふみ有。みれば、「からうじてまいりたりし
かど、御かどさしてさらに入ざりしかば、わびしくてなん
かへりまうできにしや。をろかにぞおぼすらん。少将の君
のおぼしたるけしきを見侍るに、心のいとまなくなん。
これは御ふみ也。いかでよさりだにまいらん」といへり。御
ふみ奉らん、よきひまなりと、いそぎてみれば、北方、
へやさし給ふ。あなくちをしとおもひて帰る道に、
てんやく行あひて、ふみくれたるを、とりて、はしり
かへりて、北方に、「こゝにてんやくのふしのふみ有。いかで奉

らん」といへば、北方うちゑみて、「こゝちとひ給へるか。いとよし。まめやかにあひおもひたるぞよき」とて、さしかためし

（64・ウ）

所をひきあけたれば、いとおかしうて、少将の君の

ふみ(★)み給へば、「いかゞ。日のかさなるまゝに、いみじくなむ。

　きみがうへおもひやりつゝなげくとはぬるゝ袖

こそまづはしりけれ」。いかにすべき世にかあらん」とあり。女、いとあはれとおもふ事かぎりなし。「おぼしやるだに

さありなん。

　なげくことひまなくおつるなみだ河うき身

ながらもあるぞかなしき」とかきて、おきなのふみみん

ことのゆゝしうて、「あこきかへり事せよ」とかきつけて、

さし出たれば、ふととりてたちぬ。あこき、おきなの文

をみれば、「いとも〳〵いとおしく、よ一夜なやませ給

ける事をなん。おきなのものゝあしき心ちし侍る。

（65・オ）

あがきみ〳〵、よさりだにうれしきめみせ給へ。御

あたりにだにちかく候はゞ、命のびて、こゝちもわかくなり

侍ぬべし。あがきみ〳〵。

　老木ぞと人はみるともいかでなをはなさき

いでゝきみにみなれん」。なを〳〵なにくませ給そ」と

いへり。あこき、いとあいなしとおもふ〳〵かく。「いとなやましく

せさせ給ひて、御身づからはえきこえさせ給はず。

　かれはてゝいまはかぎりのおい木にはいつかう

れしきしなはさくべき」とかきて、はらだちやせんと

おそろしけれど、おぼゆるまゝにとらせたれば、

おきな打ゑみてとりつ。たちわき御返事かく。「よべは

こゝにもいふかたなき事をきゝてだになぐさ

（65・ウ）

めば、とおもひきこえしに、かひなくてなん。御ふみからうじ

てなん。いといみじき事どもゝいできて。たいめんに

なん」とやりつ。北方は、てんやくにあづけつとおもひて、

いと有しやうにもやり戸さしかためさせねば、あこき

うれしとおもふ。くれゆくまゝに、いかゞせんとおもひわぶ。

うちざしにさしこもらんとおもひて、萬にあくまじ

きやうにかまふ。おきな、「あこき、いかにぞ御心地は」といへば、「い

みじく

なんなやみ給ふ」といへば、「いかにおはせんずらん」と、わがもの

がほにうちなげくを、あいぎやうなしとみる。「あすの

りんじの祭に、三のきみにみせ奉らん、蔵人少将の

わたり給ふを」と、北方はねきりをるを、あこききゝ

て、いとうれしきひまあるべかめりと、むねうちつぶ

（66・オ）

れておもふ。今夜だにのがれ給なばとおもひて、

やり戸のしりさすべき物もとめて、わきにはさみて

ありく。「御となぶらまいれ」などいふまぎれに、はいよ

りて、遣戸のかたの火にそへて、えさぐらすまじ

くさしてさりぬ。うちなる君は、いかにせんとおもひて、

大きなるすぎからびつの有けるを、あとをかきて、

戸口にをきて、とかうして、おさへわなゝゐて、「これあけ

させ給ふな」とぐわんをたつ。北方、かぎをてんやくにとらせて、「人のねしづまり時に入給へ」とて、ねたまひぬ。みな人〳〵しづまりぬるに、てんやくかぎをとりてきて、さしたる戸あく。いかならんとむねつぶる。じやうあけてやり戸あくるに、いとかたければ、立居ひろ

（66・ウ）

ゝぐほどに、あこききゝて、すこし戸をかくれてみゐたるに、じやうしもさぐれど、さしたるほどをさぐりあてず、「あやし、〳〵、と、うちにさしたるか。おきなをくるしめ給ふにこそありけれ。人もみなゆるし給へる身なれば、えのがれ給はじものを」といへば、たれかはいらえん。うちたゝき、をしひけど、うちとにつめてければ、ゆるぎだにせず。今や〳〵と夜ふくるまでいたの上にゐて、冬のよなれば、身もすくむこゝちす。そのころはらそこなひたるうへに、きぬいとうすし。いたのひえのぼりて、はらこほ〳〵となれば、おきな、「あなさがな、ひえこそ過にけれ」といふに、しゐてこほめきて、ひち〳〵となるは、いかにきこゆるよりあらんとうたがはし。けさぐりて、出やする

（67・オ）

とて、しりをかゝへてまどひいづるこゝちに、じやうをついさして、かぎをばとりていぬ。あこき、おかずなりぬるよと、あいなくにくゝおもへど、あかずなりぬるを、かぎりなくうれしくて、やり戸のもとによりて、「ひり|り|かけして いぬれば、よもまふでこじ。おほとのごもりね。ざうしにたちはきまふできたれるを、きみの御返事もきこえ侍らん」といひきかけて、しもにをりぬ。たちはき、「などいまゝではをり給はぬぞ。世の中いかゞはある」と、「まだ出し奉らずや。いみじくこそおぼつかなけれ。きみのおぼしなげく事いみじくなん。『夜などみそかにぬすみて奉りぬべしや。そのことあぬいしてこ』との給はせつる」といへば、「さらにいとこそいみじき。日に一どなん御だい

（67・ウ）

まいりにあけ給ふ。かくてかまふるやうは、きたのかたの御おぢにて、いみじきおきなのあるになんあわせ奉らんとて、こよひもへやに入て、かぎをとらせ給へれど、うちとにしかぐ〳〵かためたれば、たちゐひろきあけつるに、ひえ|え|て、かう〳〵していぬ。きみはこの事きゝ給ひしより、御むねをなんいみじくやみ給|給|にし」と、なきつゝいふ。たちわき、いみじきことにあわせて、ひりかけのほどえねんぜでわらふ。『いさゝかぬすみ出奉りて、この北方のたうせん』となん、きみはの給ふ」といへば、「あすまつりみに出給ふぬべかめり|り|。そのひまにおはしませ」といへば、たちはき、「いとうれしきひまにもあなるかな。いつしか夜もあけなん」と、心もとなくいひあかす。お

（68・オ）

きなはいまにいとおほくしかけてければ、けさうのこゝちもわすれて、まづとかくかれあらひし(★)そぎまいりぬ。少将、「いかゞいひつる」とのたまへば、「しかぐ〳〵なんあこきがいひし」と申に、てんやくのすけの事を、あさましくねたしきに、いかにわびしからんと、おもひ

やるもいとあわれなり。「こゝにはしばしはすまじ。
二条殿にすまん。いきてかうしあげさせよ。きよ
めせよ」とて、たちはきつかはしつ。むねうちさわぎて、
うれしき事かぎりなし。あこき、人しれず心
ちさはぎて、せんやうをかまへありく。むまの時ばかりに、
くるまふたつ、三、四の君、われやなどのり給ひて、出給ふ
さわぎにあわせて、北方、てんやくがもとにかぎこひに
（68・ウ）
やりて、「あやうし、わがなきほどに、人もぞあくる」とて、
かぎもちてのり給ふぬる事を、いみじくにくしと、
あこきおもふ。おとゞも、むこ出したてゝ、ゆかしがりて
いで給ぬ。みなのゝしりて、さゝとして出給ふすなはち、
あこきつげにはしらせやりたれば、少将こゝちた
がひて、れいのり給ふ車にはあらぬに、くちばの下
すだれかけて、をのこどもおほくておはしぬ。たちわき、
むまにて、さきだちて、おこせ給へり。中納言殿には、
むこの御とも、おとゞ、北方の御とも、人みかたにをの子ども
わかちまいりて、人もなし。みかどにしばしたちて、た
ちはきかくれより入て、「御車有。いづくにかよせん」といへば、
「たゞ此きたおもてによせよ」といへば、ひきよせているゝ
（69・オ）
を、からうじて、このおのこ二人出きて、「なぞのくるまぞ。
みないで給ひぬるに」ととがむれば、「あらず、ごたちの
まいり給ふぞ」といひて、たゞよせによす。ごたちの
とまりたるも、みなしもにおりて、人もなきほどな
り。あこき、「はやうをりたまへ」といへば、少将おりはし
り給ふ。へやにはじやうさしたり。これにぞこもり
けるとみるに、むねつぶれていみじ。はいよりて、じやう
ひねりみ給ふに、さらにうごかねば、たちはきをよび
入給ひて、うちたてをひきはなちつれば、たちはき
は出ぬ。いともらうたげにてゐたるを、あわれにて、かき
いだきて、車にのり給ぬ。「あこきものれ」とのたまふに、
かのてんやくがちかぐしくや有けんと、北方おもひたまはん、
（69・ウ）
ねたういわじくて、かのおこせたりしふみ、ふたゝびなが
をしまきて、ふとみつくべくをきて、御くしのはこひ
きさげてのりぬれば、おかしげにて、とぶやうにし
ていで給ぬ。たれもくいとうれし。かどだにひきい
でたれば、をのこどもいとおほくて、二条殿におはしぬ。
人もなければ、いとこゝろやすしとて、おろし奉
給ひて、ふし給ぬ。日比の事どもかたみにきこえ給ひ
て、なきみわらひみし給ふ。かのひりかけの事をぞ、
いみじくわらひ給ける。「ふかう成ける御けさう人かな。北の
かたいかにあさましとおもひたまはん」と、打とけていひふし
たまへり。たちはき、あこきとふして、いまはおもふ事も
なきよしをいふ。暮ぬれば、御だいまいりなどして、
（70・オ）
たちはきあるじだちてしありく。かの殿には、物とて
かへりたまひて、（★）へやの戸打たふして、うちたてもう
ちちらしければ、たれもくおどろきまどひてみ

れば、へやには人もなし。あさましく、「こはいかにしつる事ぞ」とさわぎみちてのゝしる。「このいゑには、むげに人はなかりつるか。かくぬる所までいりたちて、打わりひきはなちつらんを、とがめざりつらんは」とはらだちて、「たれかとりつらん」とたづねのゝしるに、北方いはんかたなく、ねたくいみじき事かぎりなし。あこきをたづねもとむれど、いづくにかあらん。おちくぼをあけて見たまへば、ありとみし木丁、びやうぶひとつもなし。北方、「あこきといふぬす人の、かく人もなきをりをみつけ

（70・ウ）

てしたるなり。やがておいうてんとおもひしものを、『つかひよし』との給ひて、かくつゐにまけぬる事」と、「こゝろぎもゝなくあいおもひ奉らざりしものを、しゐてつかい給ひて」と、三君をいみじく申給ふ。おとゞ、とまりたりけるをのこ二人たづねいでゝとひたまへば、「さらにしり侍らず。たゞいときよげなるあじろ車の、したすだれかけたる、いでさせ給ひてすなはちいりまふできて、ふとまかりにし」と申す。「たゞそれにこそあめれ。女は、さはえうちわりていでじ。おのこのしたるなめり。何ばかりのものなれば、かくわがいゑを、あかひる入立て、かくして出ぬらん」と、ねたがりまどひ給ふ、かひもなし。北方、此をきたるふみをみ給ひて、まだねざりけり

（71・オ）

とおもふに、ねたさまさりて、てんやくをよびすへたまひて、「かう〳〵してにげにけり。ぬしにあづけしかひもなく、かくにがし給へる。ちか〴〵してはものし給はざりける」とのたまひて、「おきたるそのふみどもをみれば」といへば、てんやくがいらへ、「いとわりなきおほせなりや。そのむねやみたまひし夜は、いみじうまどひて、みあたりにもよせ給はず。あこきもつとそひて、『御き日なり。こよひすぐして』と、さうじみものたまひし。いみじくまどひ給ひしかば、やをらたゞよりふしにき。のちの夜せめおとさんとおもひて、まふできてあくるに、うちざしにさして、さらにあけぬを、いたのうへに夜中までたちゐ、あけ侍しほどに、かぜひきて、

（71・ウ）

はらのこほ〳〵と申せしを、一二どはきゝすぐして、なをしうねくあけんとし侍りしほどに、みだれがはしき事のいでまふできにしかば、ものもおぼえで、まづまかりいでゝ、しつゝみたりしものをあらいしほどに、夜は明にけり。おきなのおこたりならず」とのべ申てゐたるに、はらだちしかりながら、わらはれぬ。ましてほのきくわりき人は、しにかへりわらふ。「いでや。よし〳〵、たち給ね。いといふかひなく、ねたし。こと人にこそあづくべかりけれ」とのたまふに、てんやくはらだちて、「わりなき事の給ふは、心にはいかで〳〵とおもへど、老のつたなかりける事は、あやまちやすくて、ふとひりかけらるゝをば いかゞせん。おきなればこそ、あけん〳〵とはせしか」と、

（72・オ）

はらだちて立ていけば、いどゝ人わらひしぬべし。わら

はなる子のいふやう、「すべてうゑのあしくしたまへるぞ。なにしにへやにこめ給て、かくをこなるものにあわせんとし給ひしぞ。いかに侘しくおぼしけん。御むすめどもおほく、まろらもゆくさき待れば、いきあひきあい、きこえふるゝ事もこそあれ。いみじき事也や」とおよすげいへば、北方、「すやつはいづちゆくともよく有なんや。いきあふとも、われらが子ども、いかゞせむ」といらへ給ふ。おのこ三人もたまへりける。太郎は越前の守にて国に、二郎は法師、三郎ぞこのわらは也ける。かくいひさはげど、かひなければ、みなふしぬ。二条には、御となぶらまいりて、少将のきみふし給て、

（72・ウ）

あこきに、「ひごろの事よくかたれ。こゝにはさらにのたまはず」とのたまへば、あこき、北方のこゝろをありのまゝにいへば、君、あさましかりける事かな、とおぼしふし給へり。「人ずくなにて、いとあしかめり。あこき、人もとめよ。殿なる人々もきこえんとのたまへども、ゆかしげなき。あこき、おとなになりね。いとこゝろおよずけなめり」と、いひふし給へれば。(★)いとのどかなる心地して、み、むまの時までふし、ひるつかた、殿に年比(参た)まふとて、たちはきに、「ちかくいたれ。只今こん」とて、出給ぬ。あこき、おばのもとへふみやる。「いそぐ事侍りて、きのふけふきこえざりつる。けふあすのほどに、きよげならんわらはおとな、もとめいで給へ。そこにもよき

（73・オ）

わらはあらば、一二人しばしし給へ。あるやうはたいめんにきこえん。あからさまにおはせよ」といひやりつ。少将のきみ、殿におはし(た)これば、かの中納言殿ゝ四の君の事いふ人出きて、「ものけ給はる。かの事、ひとひものたまへりき。『年かへらぬさきにしてんとおもふやうなん有。御ふみきこえて』と、いみじくせめ侍り」といへば、どのゝ北方、「さかき(さ歟)まにもいふなるかな。しゐてかういふ事を、きゝてよかし。人のためには、したなきやうなり。今までひとりある、みぐるし」とのたまへば、少将、「さおもはゞ(は)、はやうとりてよかし。ふみは今とてやらん。いまやうは、ことにふみかよはしせでもしつなり」とて、ゑみて立ぬ。わが御(御)かたにおはして、つねにつかひ

（73・ウ）

給ふてうどなど、づしなどかしこにやりたまふ。御ふみ、「いまのまいかに。うしろめたうこそ。内にまいりて、たゞいまかへりいで侍り。

からころもきてみることのうれしさをつゝむは袖ぞほころびぬべき」。なかくつゝましとなん、けふのこゝちは」と有。御かへり、「こゝに、

うきことをなげきしほどにから衣袖はくちにしなにゝつゝまん」ときこえたまへるを、あはれにおぼす。たちはき、心しつゝつかうまつること、ねん比也。いづみのかみのへんじ、「おぼつかなさに、これよりきこえたりしかば、はやうすまじきわざしてにげ給にきとて、つかひをもほとくうたれぬべかりけり(る歟)を、

（74・オ）
からうじてなんにげてきたりしかば、いかならんと
おもふ給へなげきつるを、うれしくたいらかにもの
したまへる事。人は今あないしてきこえん。こゝに
侍、はかゞしきものなし。このかみのいとこにて、こゝにお
はするこそ、さやうにものしつべけれ」といへり。くるれば、
きみおはしたり。「かの四のきみの事こそ、しかゞいひつれ。
われといひて、もとめてあはせん」とのたまへば、女君、「いと
けしからず。いなとおぼさば、おいらかにこそけしきはまめ。
ほいなく、いかにいみじとおもはまし』とのたまふ。少将、「かの
きたのかたに、いかでねたきめみせんとおもへばなり」とのた
まへば、女、「これはやわすれ給ひね。かのきみやにくかり
し」とのたまへば、少将、「いとこゝろよはくおはしけり。人のにくき
（74・ウ）
ふし、おぼしわくまじかりけり」と、「いとこゝろやすし」
とのたまひて、ふし給ぬ。かの中なこん殿には、「よかな
りとなんのたまふ」といひやりたれば、よろこびて、
まふけのゝしるにつけては、「おちくぼといふものゝあらば、
うちあづけてぬはせまし。(★)ほとけ、これいけらば、く
るをしむしりゐたり」。蔵人少将のきみも、御ぞ
どもわろしとて、いづといると、むつかりて、き給は
ずなどある時は、わびしうて、ものせん人もがな
とて、こゝかしこてをわかちてもとめ給ふ。『よ
かなり』との給ふ時にとりてん、おもひもぞかへる」と
て、おとゞはたちいそぎ給ふ。しはすの朔日五日|日|とさ
だめたるほどは、霜月の晦日ばかりよりいそぎた
（75・オ）
まふ。御むこの少将、「たれをとり給ふぞ」ととひければ、
「左大将殿ゝ左近少将殿とか」のたまへば、「いとおかしき
君ぞかし。うちかたらひて出入せんに、いとよきとな」
とゆるしければ、北方、はへありてうれしとおもふ。かの
少将は、北のかたのいとねたくにくゝて、いかでこれに
わびしとおもはせんとおもひしみにければ、こゝろ
のうちにおもひたばかるやう有て、「よかなり」といふ
なりけり。かくて二条殿には、十日ばかりになりぬれば、
いままいりども十余人ばかり参て、いといまめしう
おかし。いづみの守いとこなる、かう〳〵ときゝて、ま
いらせて、兵庫といふ。あこきはおとなになりて、衛
門といふ。ちいさくおかしげなるわかうどにて、おもふ
（75・ウ）
事なげにてありく。おとこもおんなもたぐひなく
おぼしたる、ことわりぞかし。少将のきみの母北方、
「二条殿に人すへたりときくはまことか。さらば、中納言
どのにい|は|、『よかなり』との給ふか」。少将、「せうそこ(★)おもふ給へ
し
かど、人もすみ給はぬうちに、たゞしばしとおもふ給て
なん。とはせ給へば、中なこんは、なかにもさいふときゝ
侍しかば。おのこは、ひとりにてやは侍。うちかたらひて
侍れかし」とわらひ給へば、北方、「いであなにく。人あま
たもたるは、なげきおふなり。身もくるしげなり。

なものし給そ。そのすへ給へらんにおぼしつかば、さてやみ給ね。いまとぶらひきこえん」とて、のちはおかしき物奉り給てきこえかはしたまふ。「此人、よげにもの

（76・オ）

し給ふめり。ふみかき、てつき、いとおかしかめり。たがむすめぞ。これにてさだまり給ね。女子もたれば、人のおぼさん事もいとおしう、心くるしうなんおぼゆる」と、少将に申給へば、ほゝゑみて、「これもよもわすれ侍らじ。又もゆかしう侍り」と申給へば、「いかで。けしからず。さらにおもひきこゆまじき御心なめり」とわらひ給ふ。御こゝろなんいとよく、かたちもうつくしうおはしましける。かくて月たちて、「あさてなん。さはしりたまへりや」と、いとをしくおぼしたれば、「かくなん」と申せば、「よかなり。まいらん」といらへ給て、心のうちには、いとおかし。おぼしけるやう、北方の御おぢにて、世の中にひがみしれたるものにおもはれて、ぢぶきやう

（76・ウ）

なるが、まじらふこともなき人の太郎、兵部少将といふ人有けり。少将おはして、「少将はこゝにか」とのたまへば、「ざうしのかたに侍らん。人わらふとて、え出立もし侍らず。君だち御かへりみ有て、これまじらひつけたまへ。をのれもしか侍りにき。わらひたてられたるほどだに過ぬれば、宮づかへしつきぬるもの也」と申せば、少将、打わらひて、「いかゞようなし侍らん」とて、たちて、ざうしにおはしてみ給へば、まだふしたまえり。またしれがましうおかして、「やゝ、をきたまへ。きこゆべき事ありてなん。申てき」との給へば、あしてあわせて、いとよくのびくして、からうじておきゐで、手あらひゐたり。少将、「などかしこにもさらにおはせ

（77・オ）

ぬ」との給へば、せうのいらへ、「人のほゝとわらへば、はづかしうて」といへば、「うとき所ならばこそはづかしからめ」とて、「君は、めはなどていまゝでもたまへらぬぞ。やもめふしゝては、いとくるしきものを」とのたまへば、せうのいらへは、あはする人のなきうちに、ひとりふして侍も、さらにくるしくも侍らず」といへば、少将、「さは、くるしからずとて、めもまふけでやみ給ひなんや」。「せうをあはする人や侍とてまちて侍なり」。少将、「いで、まろあはせ奉らん。いとよき人あり」とのたまふに、さすがにゑみたるかほ、色は雪の白さにて、くびいとながうて、かほつきたゞこまのやうに、はなのいらゝぎたる事かぎりなし。いうといなゝきて、ひきはなれ

（77・ウ）

ていぬべきかほしたり。むかひゐたらん人は、げにわらはではえあるまじ。「いとうれしき事に侍なり。たがむすめぞ」といへば、少将、「中納言の四のきみ也。まろにあはせんといへども、えおもひすつまじき人の侍れば、きみにゆづるべきとおもひて。あさてとなんさだめたる。さるよういし給へ」。せうのいらへ、「ほいなしとて、わらひもこそすれ」といへば、少将、わらふがあ

るまじきことゝおもひけるこそあはれおかしけれ
ど、つれなくて、「よもわらはじ。の給はんやうは、『をのれ
なんしのびてこの秋よりかよふを、少将とり給ふと
きゝて、をのれにはなれぬ人なれば、かう〳〵なり、
いかでえたまふぞ、とうらみしかば、いとことはりなり、さ
（78・オ）
らばふようにこそは。かのおやたちしり給はねば、
まろならぬ人もとり給てんもをこなり、このたび
あらはれ給ね、といひしかばなむ』といらへ。さらば、な
でう事かいはん。よもわらはさじ。さておはしかよひ
なば、人もおぼえ有ておもひなん」といへば、「さなゝり」
とうなづきゐたり。「さらば、あさて、夜うちふかしおはせ」
といひをき給て、出給ぬ。女いかゞおもはんとおもへども、
まさりてにくしとおぼしをきてければ(★)、二条にお
はしたれば、雪の降を見出して、火おけにをし
かゝりて、はいまさぐりてゐ給へる、いとおかしければ、
むかひゐつるに、
　はかなくて消てましかばおもふとも」
（78・ウ）
とかくを、あはれにみ給ふ。まことにとおぼして、男君、
　いはでを恋に身をこがれまし」とて、
やがておとこきみ、
　うづみ火のいきてうれしとおもふにはわがふ
ところにいだきてぞゐる」とて、かきいだきてふし給ぬ。
女きみ、いとさしことなりとて、わらひ給ふ。中納言
殿には、其日になりて、しつらひ給ふ事かぎりなし。
けふといへば、少将、兵部のもとへ、「かのきこえし事は、
今夜也。いぬの時ばかりにおはせよ」とのたまへば、
「こゝにもしかおもひ侍り」といへり。てゝにかう〳〵と
いひければ、びんしれ、びんなからんともおもはで、
「らう有て人にほめられ給ふ事は、よもあらし。
（79・オ）
はやういけ」とて、さうぞくの事いそぎ、いでた
りければ、打そうぞきていきけり。人々、そうぞき
して待に、「おはしたり」といへば、いれ奉りつ。その夜
はしれもみえで、火のほのぐらきに、やうだいほそや
かにあてなりければ、ごたちは、人にほめられ給ふ
きみぞかしとおもふに、うちつけに、「ほそやかになまめ
きてもいり給ぬ事かな」といひあへるをきゝ給ひ
て、北方、ゐゐみさけて、「かしこくもとりつるかな。われ
はさいあいありかし。おもふやうなるむこどもをとるか
な。たゞいま、このきみ大臣がね」と、ふきちらし給へば、
人々、「げに」ときこゆ。女、かゝるしれものともしらで、ふし
給にけり。明ぬれば出ぬ。少将、いかならんとおもひ
（79・ウ）
やられて、おかしければ、女君、「中なこん殿には、夕部
むこどりしたまふにけり」。「誰ぞ」とのたまへば、「まろが
おぢにて、治部卿なる人のて子、兵部少将、かたちい
とよく、はないとおかしげなるを、むこどり給へる」
とのたまへば、女君、「ことに人のとりわきてほめぬ

所よ」とてわらひ給へば、「なかにすぐれておかしげなるところをきこゆるぞかし。いまみ給てん」とて、さぶらひに出給て、少将のがりふ|ふ|みやり給ふ。「いかにぞ。ふみやり給つや。まだしくは、かうかきてやり給へば、いとおかしき事ぞ」とて、かきてやり給ふ。

よの人のけふの今朝にはこひすとかきゝしにたがふこゝちこそすれ」。たま〳〵なきの」と

（80・オ）

かきてやり給へれば、せう、ふみやらんとて、哥をよみをるほどに、かやうにて給へれば、よき事とおもひて、いそぎかきてやりつ。少将のへんじには、「よべはことなりにき。わらはずなりにしかば、うれしくなん。くわしくはたいめんに。ふみはまだしく侍りつるほどに、よろこびながらこれをなんつかはしつる」といへば、少将、いとおしく、女にはぢをみするぞなどおもへども、とくこれがむくひせんとおもひしほどに、とげてのちに、引かへて帰み|ら|ん、とおぼす事ふかくて成にけり。女君は、なをおもひ侘たるけしきいとおしうて、きかせたまはず。こゝろひとつにおかしければ、たちはきになんかたりて、わらひ給へば、たちはき、「いとうれしうせさ

（80・ウ）

せ給ふたり」とよろこぶ。かの殿には、御ふみまつほどもてきたれば、いつしかとりいれて奉る。み給ふに、かればいみじうはづかしくて、え打もをき給はず、すくみたるやうにてゐ給へり。北方、「御てはいかゞある」とみたまふに、しぬる心|心|地する事、かのおちくぼといふ名きかせておもひしよりもまさるこゝちすべし。北方、打みて、あやしう、さき〴〵のむこどりのふみみる中に、かゝれば、いかならんとむねつぶれぬ。おとゞ、をしはなちひきよせみたまへど、えみえたまはで、「色ごのみ、いとうすくかき給ひけるかな。これよみ給へ」との給へば、ふととりて、蔵人少将のつとめてのふみのおぼえけるを、うちよみて、『たえぬは人』となんかきた

（81・オ）

まへり」といへば、おとゞ打わらひて、「すきものなれば、いひしりためり。はや御返おかしうし給へ」とて、たち給をきくに、四の君、かたはらいたくわびしくおぼえて、よりふしぬ。北方、三のきみと、「いかにの給へるならん」となげゝれば、女の御かた、「いみじくおもふとも、かういはんやは。なを、をしなべて、『けふはこひし』などいはんことのふるめきたれば、やうかへてとおもひたまへるにや。こゝろえず、あやしくもあるかな」とのたまふ。北方、「さなゝり。色|色|ごのみは、人のせぬやうをせんとなんおもふなる」といひて、「はや御返じしたまへ」と、(★)おやはらからゐたちて、かくあやしがりなげき給をきくに、さらにをきあがるべき心ちもあらでふし給へ

（81・ウ）

れば、「我きこえん」とて、北方かき給ふ。

おいのよに恋もしゝらぬ人はさぞけふのけさをもおもひわかれじ」。くちをしうとなん、

女はおもひきこゆる」とて、使にものかづけてや
り給ふ。四の君は、をきあがらでふしくらしつ。
暮ぬればいととくおはしぬ。北方、「さればよ。もの
うくおぼさましかば、おそくぞおはせまし。げに
やうかへてのたまへる成けり」とて、よろこびて入奉つ。
四の君、はづかしけれど、いかゞはせんにて、出給ふにけり。
ものうちいひたる声、けはひ、ほれ〳〵しくおくれた
れば、女君、蔵人少将などにきゝあはするに、あやしげ
なれば、われうそ「恋ざめ」とはいはまほしけれとお
（82・オ）
ぼす。夜ふかく出ぬ。三日のまふけ、いといかめしうた
まふ。さぶらひのいるべき所、ざうしき所など、さま〴〵
にものすへなどして待居。御むこの少将まで
いで給て、いそぎ給ふ。只今の御代に、おぼえのたぐ
ひなき君なれば、もてはやさんとて、おとゞも
ゐでまち給ふに、「まづ、こなたに入給へ」とよば
すれば、ゆくりもなくのぼりゐぬ。火のいとあかきにみ
れば、くびよりはじめていとほそくちいさくて、
おもてはしろき物つけけさうしたるやうにてしろ
う、はないらゝがし、さしあふぎてゐたるを、人々あさ
ましうてまもるに、此兵部の少将にみなして、えね
んぜず、ほゝとわらふ中にも、蔵人少将は、はな〴〵と
（82・ウ）
物わらひする心にて、わらひ給ふ事かぎりなし。
「おもしろのこま成けりや」と、あふぎをたゝきてわ
らひ給ふたちぬ。殿上にても、物よりことに、「おもし
ろのこま、はなれてきたり」とてわらふ成けり。
かくれにゐて、「こはいかなる事ぞ」ともいひやらずわらふ。
おとゞは、あきれてえものもいはれず。人のはかり
たりけるなめりとおぼすに、たゞはらだちにはらだち
たまへど、いと人おほくみるとおぼししづめて、「こはいかで、
かくおぼへなくてものしたまへるぞ。いとあやしく」と
のたまへば、かの少将のをしへしまゝに、ほれていひゐ
たれば、いふかひなしとて、さかづきもさゝで入給ぬ。と
もの人〻はかくわらはるゝをしらで、すへたる所どもに
（83・オ）
つきてくいのゝしりて、座にゐなみたり。人ひとり
もなくしぬれば、せう、はしたなく、れいの方より入ぬ。
きたのかた、きゝて、さらにものもおぼえず、あきれまどふ。
おとゞは「老の上にいみじきはぢ見つる世かな」と、つま
はじきをいりてゐ給へり。四のきみは、丁のうちにすへ
たるに、ふといりきてふしにければ、えにげず。こ
たちは、いとおかしかりあへり。なかだちしたる人とて
も、あたにもあらず、四のきみのめのとなれば、いふべき
かたなし。たれも〳〵なげきあかすに、四日よりはと
まるといひしとおもひて、むごにふせり。

〈付記〉

本稿の資料の閲覧及び翻刻掲載の御許可を賜りました九州大学附属図書館に、深甚の謝意を申し上げます。

（りょう　たん・本学大学院博士後期課程）